

Engelbert Kaempfer の日本医学に

関する新しい資料

ミヒエル・ヴォルフガング

ドイツ人エンゲルベルト・ケンプフェルが東インド商会の医師として出島商館に来てから、一九九〇年でもちょうど三百年になる。彼は二年間の日本滞在中に、多くの情報、資料を集め、故郷レムゴーに戻ってその整理分析を行った。

しかし著書『廻国奇観』と『日本誌』のうち後者は彼の死後やっと出版された。これは、ドイツ語からの英訳を、スイス人医師ジョイヒツァーに依頼したイギリスの学者ハンス・スローンの尽力によるものであった。

当時スローンが買い集めたケンプフェルの遺稿は、今日でも *British Library* のいわゆる “*Sloane Collection*” に収められている。上記の著作の清書原稿を除くと、ラテン語、ドイツ語、オランダ語、ローマ字による日本語などを混ぜて書いているケンプフェルの様々なメモはその解説が

容易ではない。あまり研究されていないのはおそらくそのためだろうと思われる。

私はスローン・コレクションの古文書集第三〇六二を調べているうちに、ケンプフェルが日本医学に関する多くのメモを残していることに気がついた。これらの資料は、ケンプフェルが、日本医学について前記二著書に記していたこと以上に知っていたことを示している。ここにはまず、脈診、小児病を含む病名や病名、鍼灸、そして薬や薬草についてのメモやスケッチが見られる。さらに興味深いことに、出島商館で使用されていた薬品のリストが一枚含まれている。上記の古文書集の最後には日独語彙集の草稿があり、そこには驚くほど多くの日本語による薬品、医療器具、病名などが列挙され、薬草に関する会話の例文も記載されている。このことから、ケンプフェルが日本の医学やその専門用語をきわめて熱心に研究していたことがわかり、心うたれる。

(九州大学言語文化部)